『西南アジア研究』No. 57, 2002

マスリパトナムのハヴァールダール
――17世紀前半ゴールコンダ王国の交易港支配に関する一考察――

和田郁子

はじめに

コロマンデル海岸北部のクリシュナ川河口に位置するマスリパトナムは，ゴールコンダ王国（クトゥブ・シャーヒー Quṭb Shāhī 朝：1518－1687）統治下において栄えた港である。16世紀初め，デカン地方東部に興ったゴールコンダ王国は，その創始者である Sulṭān Qulī Quṭb al-Mulk（1518－1543）の時代にもマスリパトナムを含む海岸地域に至る遠征を行っているが，クリシュナ・ゴーダーヴァリー両河のデルタ地帯を同王国が安定して支配するようになるのは，16世紀後半の第4代スルターン Ibrāhīm Quṭb Shāh（1550－1580）の時代以降のことである。特に，デカン地方のムスリム5王国[1]による同盟軍がヴィジャヤナガル王国に勝利した1565年のターリコータの戦い以降，ゴールコンダ王国はこの海岸地域に対する支配を確固たるものとした。マスリパトナムが国際交易港として台頭してきた時期はちょうどこの頃，ほぼ1560年代から1570年代のことであったと考えられている[2]。以後，同港は，16世紀後半にポルトガルの海上活動に対抗して形成されたベンガル湾交易ネットワークの発展とも相まって，ベンガル湾各地の，さらにはインド洋西海域や紅海・ペルシア湾の諸港と密接な交易関係を持ちながら，インド洋交易において重要な位置を占めるようになっていった［Subrahmanyam 1990 a : 147－160 ; Do. 1990 b : 129－136］。

マスリパトナムは，周辺諸港に比べて大型船の投錨に適した地盤の停泊地を持っていたとはいえ，地形や気候などその他の自然条件については特に恵まれた港ではなかった［Alam 1959 : 170－171 ; Arasaratnam & Ray 1994 : 3－8］。それにも拘らずここがインド有数の

1） ムスリム5王国とは，デカン地方初のムスリム国家であるバフマニー朝（1347－1527）の後継王国で，ゴールコンダ王国の他にビージャプル王国（1489－1686），アフマドナガル王国（1490－1636），ベラール王国（c. 1490－1574），ビーダル王国（1492－1656）があった。

2） S. Subrahmanyam はマスリパトナムに言及したポルトガル語による最も古い記録は1540年代に遡り，その港の興隆は特に1560年代後半以降のこととみなしている［Subrahmanyam 1990 a : 147－149 ; Do. 1990 b : 129－130］。また S. Arasaratnam はデカン内陸部の政治状況と海上交通の双方の諸要因が集中することから，1570年代をマスリパトナムが長距離海上交易の舞台の前面に現れた時期としている［Arasaratnam & Ray 1994 : 25］。

国際交易港として繁栄したのは，後背地，即ちゴールコンダ王国との結びつきに負うところが大きい。コロマンデル海岸北部地域は当時の海上交易における重要な商品だった織物の一大産地であり，ゴールコンダ王国による海岸地域への勢力拡大とその支配の安定化はマスリパトナムにこの豊かな後背地をより広く提供するとともに，王国の中心部との政治・経済上の関係を強化することにもなった［Arasaratnam & Ray 1994：25－26］。1590年代初めにIbrāhīm の子 Muḥammad Qulī Quṭb Shāh（1580－1612）が Musi 川東岸に建設した新都ハイデラバードは，旧都ゴールコンダからマスリパトナムに至る東方への道の途上にあった[3]。マスリパトナムはこの幹線道路によって王国の中心部と直接結ばれて，緊密な関係を都との間に保ちながら，この関係に支えられて発展したという。このようにマスリパトナムとゴールコンダ王国の中心部との間に緊密な関係が存在したことは明らかである。

しかしながら，その関係の実態，すなわちゴールコンダ王国によるこの港の支配のあり方についての詳しい分析は管見の限り未だあまり見られない[4]。例えば S. Arasaratnam は，

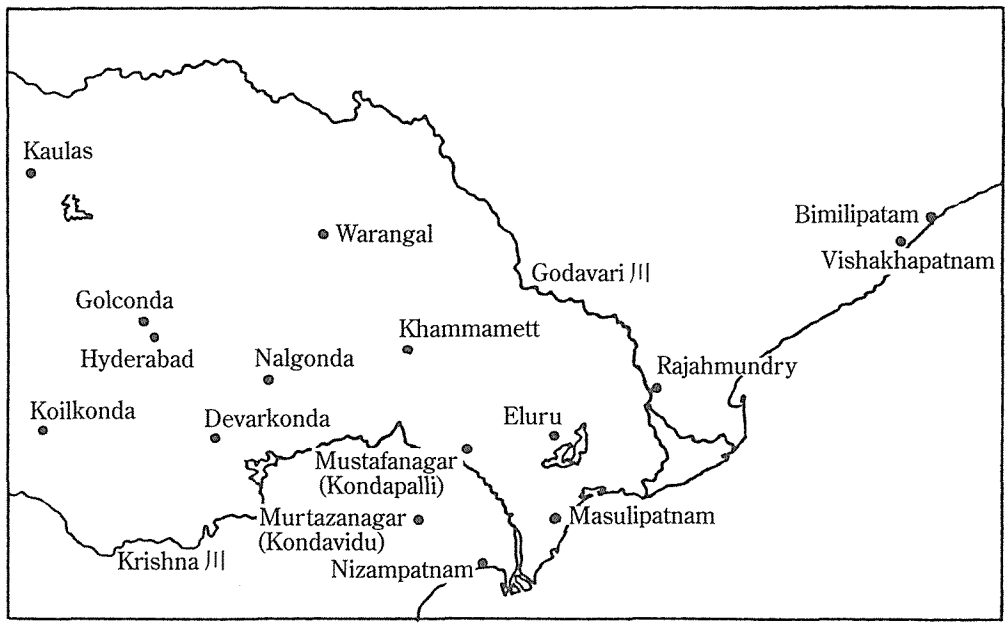

図　マスリパトナムとその周辺（Richards 1975：xiv を基に作成）

3）この道はまた，南北へ延びる新しい道とハイデラバードの中心で交差しており，その交差点には現在に至るまでハイデラバードの象徴ともなっているチャール・ミナール Chahar Minar が建設された［Sherwani 1974：301－302］。

4）S. Subrahmanyam は 'portfolio-capitalist' に関する一連の研究［Subrahmanyam & Bayley 1988；Subrahmanyam 1988；Do. 1990 a］をはじめとする種々の論考において，17世紀のマスリパトナムで活躍した有力者たち（主に Mīr Kamāl al-Dīn と Mīr Muḥammad Sayyid Ardistānī）についても取り上げているが，彼の議論は交易や船舶所有などの経済活動に関する事柄が中心で，彼らがどのようにこの港の統治と関わっていたのかについてはあまり注目されていない。

Muḥammad Qulī Quṭb Shāh 治下における東方への勢力拡大の中で「その港がどのようにゴールコンダ王国の行政機構の中に組み込まれたのか」[Arasaratnam & Ray 1994: 33] という問題を提示し，同王国の地方支配における徴税請負制（revenue farming）にも言及している。けれども，主に英語及びオランダ語の刊行史料に基づくその後の議論の焦点は寧ろマスリパトナムにおけるヨーロッパ諸国との関係に移っており，ゴールコンダ王国によるこの港の支配の実情には踏み込んでいない。また，ゴールコンダ王国の地方統治の一環としてマスリパトナムの統治の仕組みにも触れたその他の研究 [Ghauri 1977 a; Sherwani 1974: 511－513; Richards 1975: 21－24] は，いずれも少数のヨーロッパ人による旅行記に大きく依拠しており[5]，具体例に乏しい。しかし，S. Arasaratnam が言うように，同王国の地方統治体制には「役人たちの永続的なヒエラルキーは存在しなかった」[Arasaratnam & Ray 1994: 34] とすれば，その「行政機構（administrative structure)」の実態についてはさらなる検討の必要があると思われる。

ゴールコンダ王国の地方統治に関しては未だに不明な点が多いが，一般に，王国東部地域にあたるアーンドラ地方については比較的事情が知られていて，幾つかの管区（samt, maḥal, pargana）に分けられていたと言われている[6]。例えば，マスリパトナムを管轄下に含む管区は，ムスタファーナガル Muṣṭafānagar（コンダパッリ Kondapalli）を中心とするムスタファーナガル管区であった。

各管区については，その税収から毎年一定額を国に納めることを条件としてスルターンから統治を委任された「サル・サムト（sar-samt: 管区の長)」と呼ばれる人々がいたということは，Raychaudhuri 1962, Sherwani 1974, Richards 1975 及び Arasaratnam & Ray 1994 などの一致するところである。しかし，各管区を統治する権利を持った人々が常にこのように呼ばれていたわけではないようでもあり，その存在や実情についてはまだよくわかっていない[7]。

5） 特に，Relations: 78－82 の記述は繰り返し用いられている。

6） ゴールコンダ王国の地方行政単位に対する呼称は，先行研究の間で統一されていない。H. K. Sherwani はバフマニー朝の時代に使われていた "ṭaraf" 即ち province に代わって，"Simt" という呼称が現れたようだとし，後者は寧ろ district に相当するものだったと述べている [Sherwani 1974: 511]。同じ district の意味で T. Raychaudhuri は "mahal" という呼称を用いている [Raychaudhuri 1962: 6] が，HS にも例えば，"maḥal-i Muṣṭafānagar" のような形で記されている例が複数ある。一方，I. A. Ghauri や J. F. Richards はこの単位を pargana と呼んでいる [Ghauri 1977 a: 54－55; Richards 1975: 21－22]。小稿ではこの行政単位に対して便宜的に「管区」という語をあてた。

7） 例えば，「明らかにこの〔サル・サムトによる統治〕機構には例外があって，幾つかの地方は sar-i-lashkar〔sar-lashkar〕と呼ばれる軍司令官の統治下に置かれていた」[Raychaudhuri 1962: 6] とする見方や，「マスリパトナムのような遠隔の地域或いは港はゴールコンダ中央における高官の割り当て地（assignment）でもあり得たし，或いは district or provincial governor〔サル・サムト〕の管轄下に属していることもあり得」て，「双方の仕組みが機能していたと見られる」[Arasaratnam & Ray 1994: 34] という見解がある。

一方，実際にマスリパトナムにいて大きな力を揮っていたハヴァールダール（ḥavāldār）[8]については，ヨーロッパ人による旅行記や英蘭の東インド会社による報告書をはじめとする豊富な史料によって，その存在が明らかにされている。ハヴァールダールとは，ある管区の統治権を持つ上述のような人物から管区の全域或いは一部地域についての徴税などの業務を請け負った人々のことである。マスリパトナムではその他にも，港湾監督官としての役割を持つシャー・バンダル（shāh-bandar）や，警察関係の業務を担当するコトワール（kūtwāl）という役職が港の統治において重要な役割を担っていたことが知られている［Ghauri 1977 a : 61－62 ; Sherwani 1974 : 511－512 ; Richards 1975 : 21－24 ; Arasaratnam & Ray 1994 : 14－15, 33－36 ; Raychaudhuri 1962 : 6－7］。

小稿では，ゴールコンダ王国の地方統治体制の中でマスリパトナムにおける管理官のような役割を担っていたハヴァールダールに注目し，彼らを通じて同王国とこの港とがどう関わっていたのかについて考察する。特に，例えばマスリパトナムのハヴァールダールと，彼をその職に任命した人物やゴールコンダ宮廷の有力者との関係について論述を試みる。そのために，まず1610－1620年代の歴代のハヴァールダールを列挙して整理した後，彼らがこの職に着いた際の請負契約や任期及び職務の実態について，具体例をあげつつ述べる。その上で，同港での交易活動が隆盛を迎えたとされる1620年代にマスリパトナムと深い関わりを持ちつつゴールコンダ宮廷においても勢力を揮ったMullā Muḥammad Taqī Tafrishī[9]の事蹟を追いながら，マスリパトナムの発展と繁栄を支えたとされるゴールコンダ王国との「緊密な関係」の実像の一端を，同王国によるマスリパトナムの統治のあり方という側面から解明することを目指すものである。

なお，小稿で主に依拠した史料は，オランダ東インド会社（Verenigde Oostindische Compagnie : V. O. C.）による刊行・未刊行の文献，特にコロマンデル海岸（主にマスリパトナムとプリカート）からの報告書等である。その他，若干の英蘭両語による刊行史料を参考にする一方で，ゴールコンダ側の史料としては第7代スルターン‘Abd Allāh Quṭb Shāh（1626－1672）時代の年代記であるHSを利用した。

I　1610－20年代のハヴァールダール

16世紀後半から目覚しい成長を遂げたマスリパトナムは，1620年代に最盛期を迎えた。その頃のマスリパトナムの海上交易においてはペルシア人の力が支配的であったと言われて

8）HSにおいては，より語源に近い形であるハヴァーラダール（ḥavāla-dār）とも記されている。

9）J. N. Sarkarはこの人物の名前を“Mulla Muhammad Taqi Taqrishi”としており［Sarkar 1979 : 7, 9］, S. Subrahmanyamもこれに倣っているが，HSによると，彼とその兄弟のMīr Faṣīḥ al-Dīn Muḥammadのニスバは“Tafrishī”である。

いる［Subrahmanyam 1988: 511; Do. 1992: 344－345; Do. 1999: 66－70］が，ハヴァールダール職も主にペルシア人などのムスリムが占めていた。1610年代から20年代のハヴァールダールたちの名前と任期について現段階で確認できる情報を整理すると次の表のようになるが，そのうちペルシア系であることが明らかなのは3人（Mullā Muḥammad Taqī Tafrishī, Mīr Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad Tafrishī, Mīrza Rūzbihān Iṣfahānī）であり，また Basu（Vasu）Bali Rao を除く全員がムスリムであったと考えられる。

ハヴァールダール職の請負に関しては，当時ペッタパッリ Pettapalli（＝Nizampatnam）の V. O. C. の上級商務員（opperkoopman）であった P. G. van Ravesteyn によって1614年頃に書かれた記録によると，年間契約であり「最高の入札者（the highest bidder）に与えられ」たと伝えられている［Relations: 81］。例えば1617年の Mīr Qāsim の請負契約は，

ハヴァールダールの名前	任　期
Mīr Ṣadr al-Dīn	1611年以前～13年？
I'timād Khān[10]	1613年？～14年6月頃 1619年7月～1621年10月以前
Basu（Vasu）Bali Rao	1614年6月頃～？
Mīr Qāsim	1617年～1619年7月 1621年10月以前～1623年5－6月頃？
Mullā Muḥammad Taqī Tafrishī	1623年5－6月頃？～24年？ 1626年4月～1627年10月
Diyānat Khān[11]	1624/25年～1626年4月
Mīr Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad Tafrishī	1627年11月～1629年4月頃
Mīrza Rūzbihān Iṣfahānī	1629年4月頃～1631年7－10月頃

10）このハヴァールダールの名前を S. Arasaratnam は "Ahmadu Khan" [sic] とし［Arasaratnam & Ray 1994: 38－39］，W. H. Moreland は "Itimād Khān" であろうとしている［Floris: 111 fn.3］。また，Arasaratnam も Moreland も1613年末頃には「Atmachan と Busebullerau」の二人が共同でハヴァールダール職を請け負っていたと見ている［Floris: 133 fn.2; Arasaratnam & Ray 1994: 38］。しかし，それから間もない1614年4月に「Atmachan は，〔彼の契約の〕年の終わりが近づいてきたので，決算書を提出するために，また彼の統治権を更新するために Golconda へ向けて出立した」［Floris: 120］というので，当時ハヴァールダール職を請け負っていたのは恐らく I'timād Khān 1人で，Basu Bali Rao はマスリパトナムにおける彼の協力者であったのではないかと考えられる。さらに，同年7月の J. Gourney の報告で「我々の到着〔6月〕の知らせが王の宮廷に届くや否や，Masulpatam〔Masulipatnam〕にも Pettepoly〔Pettapalli〕にも別の Governors が指名された」［LEIC II: 84］と言われていること，P. Floris もその後14年10月には Basebullerau〔Basu Bali Rao〕だけがハヴァールダール職にあったと伝えていること［Floris: 133］などから，この年の6月頃に I'timād Khān に代わって Basu Bali Rao がハヴァールダール職を請け負ったものと考えることができる。

11）T. Raychaudhuri は，このハヴァールダールの名前としてオランダ語史料が伝える "Jan Etgan" を "Inayet Khan" のこととしているが，HS にはそうした名前は見出せない。その一方で HS は，その頃マスリパトナムやムスタファーナガル管区と関わりのあった "Diyānat Khān" という人物がいたと伝えている［HS: 85－86］。そこでここでは "Jan Etgan" を後者として考える。注31）参照。

「その同じ〔場所（＝マスリパトナム）の〕統治権（gouverne）を年100,000パゴダ[12]〔支払うと言う条件〕で7年間借り受け」るというものであった［Coen VII: 265］。また，Muḥammad Taqī が1626年にマスリパトナムに戻ってきたときには，年間140,000フンでマスリパトナムの，そして27,000フンでペッタパッリのハヴァールダール職を合わせて請け負っていたとされる［VOC 1090: n. f.］。しかし実際の彼らの任期は，上の表に見るように，請負時の契約にある7年或いは5年という期間には及ばなかった。また，P. Floris の伝えるところによると，1611年10月に契約を更新してマスリパトナムに戻ってきたMīr Ṣadr al-Dīn は，「向こう3年間その地方（countrie）〔の徴税・管理〕を改めて請け負った」［Floris: 17］にもかかわらず，1613年末には最早ハヴァールダール職になかった［Floris: 111］。

請負契約時の条件はともかく，実際に1人の人物が続けてハヴァールダール職にあった期間は，少なくとも上記の表に見える時期においては，大体1－2年程度であった。そして，ハヴァールダールたちは一般にその職を離れるとマスリパトナムから姿を消した。これに対して当時のマスリパトナムのシャー・バンダルについては，1623年5月のイギリスの報告において，Khwāja Muḥammad Qāsim（Coge Mahamad Cashim）という名前の人物で「（伝えられるところによると）32年間この職にあり続けている」［EFI 1622－1623: 233］と言われていることから，ハヴァールダールとは対照的に長い間交代することなく同じ人物が務めていたようである[13]。

では，上述のようにハヴァールダールたちの実際の在任期間があまり長くならなかったのは何故だろうか。その理由としてまず考えられるのは，ハヴァールダールが彼にその職を請け負わせた任命者との間で年期契約を更新することができない場合があったのではないかということであろう。上述のように，ハヴァールダールとは，ある管区の管理権をスルターンによって委任された人物からその管区の全域あるいは一部地域に関する徴税などの業務を請け負う者であった。その意味で，ハヴァールダールは業務の「個人的な請負人（private entrepreneur）」［Richards 1975: 23］であり，第一に自分の任命者に対してその職務を遂行する義務と責任を負っていた。ハヴァールダールは契約更新のために毎年自分の任命者の許へ行くことになっていたが，「もしハヴァールダールたち（Governors）が年末までに〔納めるよう定められた〕全額の支払いをしなければ，彼らは時には生涯二度と健康を回復できないほどにまで鞭打たれることもしばしばであった」［Relations: 81］とも言われている。こうしたことから，ハヴァールダールが納めるべき金額を期限通りに支払えなければ，

12) パゴダ pagoda とは当時デカン地方を含む南インドで流通していた金貨（varaha, hun）に対するヨーロッパ人による呼称。

13) また，このシャー・バンダルが1627年1月に「100歳近い」年齢で死去すると，彼の息子が後任のシャー・バンダルとなったという［VOC 1095: 62 r］。

契約を打ち切られる場合もあったと考えられる。

1618年に生じた交易権をめぐるオランダとハヴァールダールとの衝突，及びその後のハヴァールダールの交替に関わる以下のごとき事件は，ハヴァールダールとその任命者の間にどのような関係があったかを示す一つの例となろう。この年，ハヴァールダールであったMīr Qāsimは，現地の商人がオランダとの取引を行うためには商人一人当たりが2,500フンをハヴァールダールに対して支払わなければならないという命令を出した。そのような手段によって彼は他の商人たちを締め出し，彼自身や彼の認めた商人だけでオランダとの取引を独占しようとしたのである[Coen VII : 360]。そこでオランダは「grooten Gouverneur[14]」に対して苦情を訴えたが受け入れられなかった。それどころか，この「grooten Gouverneur」は「我々〔オランダ〕と取引のあった商人たちをGolconda[15]」に召喚し，500パゴダ（pag[ode]n）の罰金（pene）を彼らから取り立て，この地〔マスリパトナム〕の我々の方にはかの有力な〔商人の〕Lingua[16]を派遣し」て，オランダとの取引をLingua一人に独占させようとしたという［Coen VII : 427－428］。

このような取引の独占はオランダの持ち込む品物の価格下落を引き起こしたため，オランダ側は対抗措置としてマスリパトナム商館の一時閉鎖や武力行使も検討したが，結局1619年7月，以下のようにしてこの問題は解決した[17]。

> 昨日〔7月21日[18]〕の夕方，Masulipatan〔マスリパトナム〕にいるgouverneurs〔ハヴァールダール〕を収監し，Golcondaに連れてくるようにとのfirman〔farmān：勅令〕が届きました。そしてまた，王はGolcondaにいたMasulipatanのGrooten Gouvern[eu]rから彼の統治権（gouverne）を取り上げました［Coen VII : 438］。

以上のように，この事件においてハヴァールダール職を請け負わせていた「マスリパトナ

14）従来の研究では，こうした“groot gouverneur”や“great governor”に類する語（例えば後述の“opper-gouverneur”など）を「サル・サムト」を表わすものとして捉えている。例えばDFI : 100, 109を参照。しかし，筆者は現段階においては，これらの語がサル・サムトなる官職乃至は役職を意味するのか，或いは単に「ハヴァールダールを任命する権利を有する者」を指すのかが確定できていないという立場から，小稿においては敢えてこれらを訳さずに用いる。

15）オランダ語史料においては，一般に“Golconda”をハイデラバードと同一視して「ゴールコンダ王国の首都」という意味で用いることが多い。

16）ヨーロッパ人と取引のあったマスリパトナムの大商人で，他にもLingenaやLinganna などと呼ばれていることがある。

17）さらに，新任のハヴァールダールがもたらした7月25日付の勅令によって，「オランダ人（de Hollanders）は，以前と同様に，年3,000パゴダの支払いによってあらゆる関税と輸入税（tollen ende jmpossten）を負うことなく，彼らの望むところで，〔望む〕人と取引をし，売買することができる」ことが保証された［CD : 154－155］。

18）小稿においては，オランダ語史料を多用したことから西暦はグレゴリウス暦に統一し，EFIやFlorisなどユリウス暦に基づく史料を参照した際やヒジュラ暦の西暦への換算についてもこれにならった。

ムの grooten gouverneur」は，収入を得るためにハヴァールダールの政策を支持し，後押ししている。しかし，この「grooten gouverneur」自身がこの地方の統治権を失ったとき，彼との間で7年という契約期間を持っていたはずの Mīr Qāsim もまたその職を解かれたのである。

このことから，他にも中央における官位の再配分などでマスリパトナムを含む管区の統治権がある人物から別の人物へ移ったことによって，ハヴァールダールが交替する場合もあったと推察できる。実際に，次章でも述べるが，例えば Muḥammad Taqī の二度目のハヴァールダール就任（1626年）はそれに先立つ新スルターンの即位とその後の官位の異動に伴うものであった。また，彼の1628年の離職は，彼をハヴァールダールに任命した Manṣūr Khān Ḥabashī が，今度は彼を中央の官職に就かせようと召還したためであった。

さて，ハヴァールダールの最も重要な仕事は担当する地域から税を徴収することであったが，実際にはその活動は単に徴税業務のみにとどまらなかった[19]。当時，この地において交易活動を行っていたヨーロッパの国々としてはオランダ，イギリス及びデンマークがあったが，これらの国々の東インド会社の報告書をはじめとするヨーロッパ側の史料では，ハヴァールダールは通常，「知事」（gouverneur や governor）と呼ばれている。これはハヴァールダールがゴールコンダ王国の現地代表とみなされていたためであろう。例えばオランダのマスリパトナム商館日誌（1626年3月～1628年9月）［VOC 1095：48－77］を見ると，オランダやイギリスの商館員や現地の商人などが，勅令の通達や税の支払い要求等のため，事あるごとにハヴァールダールによって税関（banksaal, bangsal）に呼び出されていた様子が窺える。

収入を確保することはハヴァールダールにとってもその任命者にとっても重要であったが，それは彼ら自身も上納するよう定められた額を期限内に納められなければ厳罰に処される可能性があったためである［Ricahrds 1975：23－24］。また，ハヴァールダールが徴収し納めることになっていた税額はその職務の請負契約時に予め定められていたので[20]，これを越える収入があった場合，余剰分をハヴァールダール自身の利益とすることも可能であった。そのため，上述の Mīr Qāsim がオランダとの取引を独占することを試みたように，ハヴァールダールが個人的にも経済活動に積極的に参加しようとした例は多い。そして中にはマスリパトナムでの商取引に加えて，自ら船舶を所有して積極的に海外交易に参入する者も現れた。

---

19) P. van Dam によると，ハヴァールダールの権限は以下のように大きなものであった。「haweldaer は主権者（souvereyn）として統治している。彼は，誰に相談することもなく望みの者を殺し追放し，昇任させ降任させる。彼の主人〔任命者〕の耳にそうしたことが届き，そのために彼が処罰されるようなことがあると，彼は罰金（geldboete）を払って自由になるのだが，その金を彼は様々な方法で人民（d'onderdanen）から収奪している」［Van Dam：150－151］。また，Arasaratnam & Ray 1994：34－35 も参照。

20) しかし，上述のようにその金額は一定ではなかった。

そうした人物の中で最もよく知られているのは，1637年にサル・ハイル，39年にワズィール（wazīr）となり，南方遠征に活躍して43年にはミール・ジュムラ（mīr-jumla)[21]となったMīr Muḥammad Sayyid Ardistānī であろう[22]。17世紀のゴールコンダ王国では，同様にハヴァールダール職在任中に力を貯えて高位に就いた人物が他にも複数存在しており，次のⅡで扱うMuḥammad Taqī もその1人である。

こうした人々の場合，マスリパトナムのハヴァールダール職はゴールコンダ王国における高位の官職への「踏み台（stepping stone)」[Ghauri 1977 a : 61 ; Sarkar 1979 : 8] となったと考えられてきた。しかし，勿論，全てのハヴァールダール経験者がそうした栄達の道をたどったわけではない。では，どのような場合にハヴァールダール職は出世のための「踏み台」となり得たのだろうか。換言すると，どのような人々がハヴァールダール職を利用して王国において勢力を伸張することに成功したのだろうか。

上記の表によると，1610－20年代のマスリパトナムにおいて，あるハヴァールダールが長い間続けてその職にあった例は見られないが，同じ人物が再任された例はある。即ち，上記表中に見える8人のハヴァールダールのうちI'timād Khān, Mīr Qāsim及びMuḥammad Taqī の3人はそれぞれ2度この職に就いている。この点に関しては，例えば1619年7月のI'timād Khān の再任の際にオランダの報告書が「そのモール人たち（de mooren)[23]は，その港（bandaer）に戻ってくることを熱心に請い願っているのです」[Coen VII : 438] と伝えている。このことから，マスリパトナムのハヴァールダール職は彼らにとって相当に魅力的な地位であったらしいことが推察できる。

これらの3人の中でも特にMuḥammad Taqī はその後サル・ハイルの地位に昇って力を揮った人物である。Mīr Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad とMīrza Rūzbihān も同様にサル・ハイルになったことがあるが，Muḥammad Taqī が実質的なミール・ジュムラとしてもゴールコンダ宮廷において重んじられたのに対し，先の二者の実績と評価は彼のそれには遠く及ばなかったという［Sarkar 1979 : 8－10]。そこで次章では，1610－20年代の歴代のハヴァールダールの中でこの職を高位への「踏み台」として最も有効に利用することに成功したMuḥammad Taqī に注目し，彼とマスリパトナムの関係について考察を試みる。

---

21) ゴールコンダ王国においてミール・ジュムラとは，本来は国庫の歳入と歳出を担当する財務大臣に相当する役職で，ペーシュワー（peshwā : 宰相）に次ぐ地位とされた。しかし，実際には，法制の維持，軍隊の召集，軍事遠征の統率等の役割を担うこともあり，またペーシュワーの地位が空席のままの場合など，ミール・ジュムラが実質的な宰相の位置を占めることも多かった[Ghauri 1977 b : 190－192 ; Sherwani 1974 : 506－508]。

22) 彼はその後1656年にはゴールコンダを離れ，以後はムガル朝のAurangzīb帝（1658－1707）に仕えた。Mīr Jumla の呼称で知られる彼については，主にその政治・軍事的側面からの伝記的研究［Sarkar 1979］がある。またハヴァールダール期以降の彼の経済活動については，特にSubrahmanyam 1988 ; Do. 1990 a : 322－327 を参照。

23) ここでは「ムスリムのハヴァールダール経験者」の意であろう。

II Mullā Muḥammad Taqī Tafrishī とマスリパトナム

Muḥammad Taqī の前歴については，管見の限り未だよくわかっていない。オランダ語及び英語の史料でも，また HS でも，彼の名はまずマスリパトナムのハヴァールダールとして現れる。I で見たように，彼は I'timād Khān や Mīr Qāsim と同様にハヴァールダール職を2度経験しているが，その在任期間は他の人々と比べても長いとはいえない。では，特に Muḥammad Taqī がマスリパトナムのハヴァールダールからサル・ハイルの座にまで就くことができたのは何故だろうか。以下では，彼がどのようにマスリパトナムやゴールコンダ宮廷の有力者たちと関わっていたのか，またそれがマスリパトナムに対してどのような影響を及ぼしたのかについて，段階を追って検討する。

1 ハヴァールダールとしての Muḥammad Taqī

Muḥammad Taqī が最初にハヴァールダールとしてマスリパトナムに来たのは，おそらく 1623 年のことと思われる[24]。その頃マスリパトナムでは，オランダのコロマンデル長官 (directeur) Abraham van Uffelen が前任のハヴァールダール Mīr Qāsim との間で既に様々な衝突の火種を抱えていた[25]。そのような中に着任した Muḥammad Taqī は，度重なる Van Uffelen の敵対的なやり方に対して強攻策で対抗して，1623 年 11 月オランダのマスリパトナム商館を急襲し[26]，Van Uffelen を捕虜としてハイデラバードへ送った。そして，

---

24) 1623 年 6 月 1 日（ユリウス暦，グレゴリウス暦では 5 月 22 日）付けのイギリスのマスリパトナム商館からの報告として，シャー・バンダルの Khwāja Muḥammad Qāsim (Coge Mahamad Cashim) が「今現在 Governor〔ハヴァールダール〕の不在にあたって Governor として統治している」と伝えている [EFI 1622－1623 : 233]。また，その後 Van Uffelen の拘束・連行に関する一連の事件の際に Muḥammad Taqī がハヴァールダールであったことは確認できる [Coen V : 118－119 ; VOC 1090 : n. f.]。なお，VOC 1083 には 1623－24 年に記された Van Uffelen 自身の書簡を含むコロマンデルから送られた報告の写しが収録されているというが，筆者がハーグ市の Nationaal Archief（当時の Algemeen Rijksarchief）を訪れた際には修復作業中であったため，今回は参照することができなかった。今後機会があればこれらの報告書を確認し，必要に応じて補遺・訂正等を行いたい。

25) 例えば，1622 年 4 月，マラッカからベンガルへ向かっていたポルトガル船が風でマスリパトナムに吹き寄せられ，ハヴァールダールに入港と同港での取引の承認を求めてきた。これに反対したオランダはポルトガル船を襲い，ハヴァールダールに対してポルトガルへの便宜を図らないように要求したが，それに対してハヴァールダールはオランダ商館への人々の行き来を禁じて両者の関係は緊張した。しかしその後 Van Uffelen 自身が都に赴いて，ポルトガル船から獲得した戦利品の一部を差し出し，ポルトガル人の捕虜を解放することでこの件は決着した [Coen VII : 984－985, 992－993]。

26) このときの対立の背景には，（1）Van Uffelen がスルターンの禁止命令に反して強引にアラカンへ送るタバコの荷積みを行ったこと，（2）両替商 (saraff〔ṣarrāf〕) を監禁して不利なレー↗

オランダは彼の身柄を取り戻しゴールコンダ側との関係を修復するために16,000フンを支払うことに同意せざるを得なくなった[27]［Raychaudhuri 1962 : 30 ; Arasaratnam & Ray 1994 : 41－42］。

この事件の後Muḥammad Taqīは一時ハヴァールダール職を離れた[28]が，ハヴァールダールとオランダとの対立はその後も続いた。例えば1624年末のマスリパトナムからの報告では，オランダと取引をする権利は貸し出され，「そのために〔現地の〕商人，職人，契約者（pachters），そして水運び人（water haelder）に至るまで誰一人として」自由にオランダの商館を訪れることはできず，取引をするためにはハヴァールダール（gouverneur）に年ごと或いは月ごとに前以ていくらかの支払いをしなければならなくなったと伝えられている［VOC 1085 : 218 r］。この政策によって自由な取引を阻害され大きな打撃を受けたオランダは，当時マスリパトナム周辺地域に対して力を持っていたゴールコンダ王国のサル・ハイル[29]に使節を送って交渉を試みた。しかし，「サル・ハイル（Zercheijl）が彼の収入をそこから得ているところのMasulipat[nam]」からの撤退をオランダ側が示唆したことはサル・ハイルを怒らせてしまい，交渉は失敗に終わった［VOC 1085 : 218 r－219 r］。そして翌1625年，オランダ商館において取引をする権利は，各々がハヴァールダールに対して3,000フンを支払うことを条件に，現地の有力な3人の商人に与えられた[30]［VOC 1084 : 164 r］。1625年10月，取引を活性化させようにも策に窮したオランダは「王の側近の有力者であるManchorchan〔Manṣūr Khān Ḥabashī〕」に助力を請うことにした。しかし，その後もしばらくの間は特に見るべき変化は起こらなかった［VOC 1087 : n. f. ; VOC 1090 : 26 r–v］。

1626年2月，Sulṭān Muḥammad Quṭb Shāh（1611－26）が逝去した。そして，'Abd Allāh Quṭb Shāhの即位後に行われた官位の異動でManṣūr Khān Ḥabashīがミール・ジュムラに任ぜられた［HS : 33－34］。マスリパトナムでは，同年4月8日に都から届いた「王のfirmaen〔farmān〕」によって，ハヴァールダールのDiyānat Khānが「彼の民に対

↘トでのレアル貨の両替を強制したこと，（3）マスリパトナムのムスリム商人（Moorsche cooplieden）にペグーに向かうための通行証の交付を拒否したことなどがあった［GM : 154］。

27）しかし，Van Uffelenはこのときに受けた拷問の後遺症から回復せず，翌年2月に死去した。

28）Muḥammad Taqīがいつ同職を一時退いたのかは正確にはわからないが，1625年12月5日付プリカート発のオランダの報告書が伝えているように，遅くともこの頃までにはDiyānat Khān（Janetchan）がハヴァールダールとなっている［VOC 1087 : n. f.］。

29）当時ムスタファーナガル地方に対する権限を持っていたように伝えられるこのサル・ハイルはKhwāja Afżal Turkであろう。同地方がいつ頃彼の勢力下に入ったのかはよくわからないが，彼はSultan Muḥammad Quṭb Shāhの時代に9年間にわたってサル・ハイル職にあり，その治世の終わる10ヶ月ほど前に罷免された。しかしその後，'Abd Allāh Quṭb Shāhの即位の後まもなくManṣūr Khānの意向によって勢力を回復したという［HS : 35－36］。

30）そして彼ら以外の商人たちはオランダと取引を行うことができなくなった。

する悪政と悪行のために」身柄を拘束された[31]。そして，同月24日にはMuḥammad Taqīが後任として再びマスリパトナムにやって来た［VOC 1095: 50 r, 51 r］。このとき，Muḥammad Taqīは2度目のハヴァールダール職をManṣūr Khānから請け負ったとされ，この両者の関係については1626年10月付けのオランダの報告書で以下のように言われている。「今〔マスリパトナム周辺の地域の〕請負地（pachtinghe）を持っている者は，王の側近，いや寧ろその王国〔ゴールコンダ〕において絶大な力を有する（doen ende laet）Manchurcham〔Manṣūr Khān〕です。彼がそこにonder Gouverneur〔ハヴァールダール〕を置いています」［Coen VII: 1181］。

こうして再びハヴァールダールになってからのMuḥammad Taqīは，オランダやイギリス，デンマークというヨーロッパ諸国との間に様々な軋轢を引き起こした[32]。例えばオランダに対しては，年間3,000フンと定められていた税を直ちに支払うように要求し，オランダが商品が売れるまでは払えないと答えると，代わりにスパイス（ナツメグ，クローブ，メース）を安い値段で自分に売るように強要したという［VOC 1095: 54 v–55 v］。

Muḥammad Taqīは自ら船を所有して交易にも参加していたが，それだけでなくManṣūr Khānに代わって彼の交易活動に関わる事柄を扱うこともあった。例えば1626年6月29日には，Muḥammad Taqīは自分の船とManṣūr Khān（Mansorgan）の船が航行するための通行証（vrijgelijt）をオランダに要求し[33]［VOC 1095: 53 r］，またその翌年には，2月にビミリパタムBimilipatam沖でオランダが拿捕したポルトガル船に積まれていたManṣūr Khān名義の品物の返却を要求したりもしている。

こうした業務や多くの贈り物によって[34]，Muḥammad Taqīは Manṣūr Khānとの結びつきを一層強めることに成功したようである。彼は1627年に再びハヴァールダール職を離

---

31) その後Diyānat Khānは1626年7月にマスリパトナムを離れ，「Condapilla〔Kondapalli = Muṣṭafānagar〕の統治」を任されたらしいことが伝えられている［VOC 1095: 53 r］。一方HSによると，彼はムスタファーナガル管区（maḥal-i Muṣṭafānagar）やマスリパトナムの統治に携わっていたことがあったとされる。また彼は，Manṣūr Khānがミール・ジュムラであった頃からムルタザーナガル管区（maḥal-i Murtażānagar）の統治を任されていたが，A. H. 1038/A. D. 1628–1629年にこの地方に起こった叛乱で戦死したという［HS: 85–86］。オランダ語史料でも，「Condawiera〔Kondavidu = Murtażānagar地方〕のGouverneurのJan Etgan」が1630年ごろまでにこの地方で度々起こった叛乱の中で死んだことが伝えられている［VOC 1100: 140 v–141 r］。

32) Muḥammad Taqī及びその後継者たちとオランダの間に生じた問題については，Raychaudhuri 1962: 32–35; Arasaratnam & Ray 1994: 42–45参照。ただし，どちらもMuḥammad Taqīがハヴァールダール，"opper-gouverneur"或いはサル・ハイルのどの立場でそうした問題に関わっていたのかということには全く触れておらず，曖昧である。

33) このときオランダはManṣūr Khānのゴールコンダ王国における勢力の大きさを考慮してすぐに通行証を発給した。

34) 例えば1627年7月に"Golconda"に赴いた際，Muḥammad Taqīは Manṣūr Khānとスルターンへの贈り物として2頭の象をはじめとする総額10,000フン以上の品々を持っていったという［VOC 1095: 66 v］。

れて都に召還されることになるのだが，その際の事情をマスリパトナムの商館日誌は以下のように伝えている。

同月〔9月〕30日。Moorsche gouverneur Mamettackij〔ムスリムのハヴァールダールMuḥammad Taqī〕は，その統治権（'t gouverna）を一時的に引き継ぐよう彼の代理人（aghent）とBramenees[35]をここに残し，Golcondaへ向けて出発しました。Mamettackijの兄弟ができる限り早く同地〔マスリパトナム〕で〔ハヴァールダール職を〕継ぐものと思われます。ですから，その統治権は依然としてこの人物〔Muḥammad Taqī〕の下にあります［VOC 1095 : 69 r］。

これに先立ち都ではManṣūr Khānの陰謀によってコトワールのQāsim Begが罷免されていた。そしてManṣūr KhānがMuḥammad Taqīを召還したのは，都のコトワールにMuḥammad Taqīが任ぜられるようにするためであった。しかし，Muḥammad Taqīのスルターンへの謁見は何かと理由をつけられて3ヶ月経っても実現せず，結局A. H. 1037年Rabī' I月17日（1627年10月28日），Qāsim Begが罷免された頃からコトワール職を代行してきたḤasan Begが正式に都のコトワールに就任した。

しかし，Manṣūr KhānはMullā Muḥammad Taqīを自分の許に留め，コトワール職（kūtwālī）よりもはるかに重要な地位であるミール・ジュムラ職（mīr-jumlagī）の全ての重要事を彼に委ねて，自分の代わりにディーワーンの業務（dīwānī）のあらゆる重要事の手綱をMawlawī〔Muḥammad Taqī〕の選択するところに明け渡した。……〔彼の兄弟である〕Mīr Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad Tafrishīが繁栄の港（bandar-i ma'mūra）なるMachilīpatan〔マスリパトナム〕に送られた。そして，そのmaḥal[36]〔の管理〕は上述の人物に委ねられた［HS : 73］。

こうしてMuḥammad Taqīは自分の兄弟を次のハヴァールダールに据えることに成功した。しかも，上記のように，マスリパトナムにおいては既に彼の出立前にそのことが知られていた。このことから，Faṣīḥ al-Dīn Muḥammadへのハヴァールダール職の引継ぎは，従来の研究で言われているような「入札」によるものではなく，Muḥammad Taqīの指名によるものであったと考えられる。また，ここで他のハヴァールダールたちが辞任した時の情況を見てみると，例えば彼の前任者であるDiyānat Khānは「拘束あるいは十分な監視のもとに置くよう」にという命令のもとに捕らえられて辞め［VOC 1095 : 50 r］，1619年7月にMīr Qāsimは「収監しGolcondaに連れてくるよう」にと言われて辞めさせられてい

35）実際の業務においてハヴァールダールは「バラモンの書記や主計（brahman writers and accountants）及びコーマティ（komatty）の商人や財政家」に頼っていた［Arasaratnam & Ray 1994 : 36］というが，この"Bramenees"もおそらくMuḥammad Taqīのそうした協力者のことを指すのであろう。

36）ここでは，ムスタファーナガル管区ではなくマスリパトナムとその周辺地域のことを指すと思われる。

る［Coen VII : 438］。しかし Muḥammad Taqī は，彼らとは異なり予め自分の後継者を手配した上でハヴァールダール職を離れることができた。このことは，次節で見るようにその後も彼がマスリパトナムとの関係を維持し得た一つの大きな理由であるといえよう。

2 Muḥammad Taqī と Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad 及び Manṣūr Khān

ハイデラバードにやってきた Muḥammad Taqī は，上述のように都のコトワール職を得ることはできなかったが，その後1年ほどの間 Manṣūr Khān に代わって実質的なミール・ジュムラの役割を果たした。またその一方で，彼は「マスリパトナムの opper-gouverneur」［VOC 1095 : 77 v］としてこの港の諸事にも依然として深く関わっていた。

ハヴァールダールとなった Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad は Muḥammad Taqī の「搾取し，暴威を振るう（schrobben ende tiraniseeren）遣り口をしっかりと全て見習って」［Coen VII : 1367］，この港を支配した。オランダやイギリスなどとの取引はハヴァールダール自身による独占となり，1628年9月頃にはもう彼以外にこれらヨーロッパ諸国のもたらす品々の買い手はなく，しかもその価格も彼が望むままに低く抑えられてしまっていた［Coen VII : 1436－1437］。彼は先述の Lingua などの3人の現地商人に3,000フンの金を払わせてオランダやイギリスと取引する権利を与えておきながら，実際にはこれらの国々との直接取引を自分で独占した。そして，そのようにして安く買った品物に利益分を上乗せしてこれらの現地の商人に転売したが，この方法はオランダ・イギリス両国にも，品物の買取を強要された商人にも大きな損害を与えた［EFI 1624－1629 : 282－283 ; Coen VII : 1133, 1341－1342］。

しかし，Muḥammad Taqī は Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad にマスリパトナムのことをただ任せていたわけではなかった。1628年5月3日には，Muḥammad Taqī は自ら「彼の統治権（gouverna）のもとにあるこの地でことがどのように進んでいるかを一度見るために」［VOC 1095 : 74 r］マスリパトナムに赴いている。このとき彼はオランダの商館員たちと面会し，彼の荷をホルムズ（Ormus）に運ぶように，さもなければ少なくともペルシアへ向かう彼の船を保護するように要求した。オランダ側はこの件についてはバタヴィアに諮らなければならないことを理由に判断を保留し，彼は約1ヶ月後の6月10日にこの問題に関する返答を得られないままマスリパトナムを離れたが，このことは彼が依然としてマスリパトナムを拠点とする交易活動の進展に深い関心を持っていたことを示している[37]。

---

37) オランダは結局3年以上にわたってこの要求に対する返答を引き延ばしたが，1630年代初め頃までには情況が変化してマスリパトナム-バンダル・アッバース間のリンクが発足した［Subrahmanyam 1988 : 512－513 ; Do. 1990 a : 319－322］。また，この年の9月にペグーやアチェへ向けてマスリパトナムを出帆した船の中には「マスリパトナムの gouverneur」のものと言われる船があった。当時の Muḥammad Taqī と Mīr Faṣīḥ al-Dīn の関係等を考慮すると，これはハヴァールダール即ち後者のものではなく，“opper-gouverneur” 即ち Muḥammad Taqī の船ではないかとも考えられる［Coen VII : 1447］。

一方，都ではMuḥammad Taqīが力をつけていく中で，彼の後援者であったはずのManṣūr Khān Ḥabashīの存在感は急速に薄くなっていったようである。Manṣūr KhānはA. H. 1038年の初め頃（1628年9月初旬）に死去するのだが，9月13日付けのマスリパトナム商館日誌は，「Golcondaから来たMiercamaldij〔Mīr Kamāl al-Dīn〕の書簡」による情報として，Manṣūr Khānがスルターンの命令によって毒殺され，そのあおりを受けてMuḥammad Taqīも逮捕されたと伝えている。このとき「このMansurgan〔Manṣūr Khān〕はcaffer〔kāfir：非ムスリム〕即ちAbijcij〔Ḥabashī：アビシニア人〕であったのだが，Niesamchaの王〔Niẓām Shāh〕の別のcafferと謀って」反逆を意図した嫌疑をかけられたのだという［VOC 1095：77 v］。しかし，HSの方はこのようなことには触れておらず，単に「Manṣūr Khānに突然の病気が生じて」死んだのだとしか伝えていない［HS：76］。

Manṣūr Khānの死因や，彼の死が一時的にせよMuḥammad Taqīの立場に影響を及ぼしたのかどうかについては，さらなる検討を要し，現段階では断定することはできない。しかし，A. H. 1038年Ṣafar月23日（1628年10月28日）にMuḥammad Taqīは並み居る競争者たちに先んじてサル・ハイルに任ぜられた［HS：76－77］ので，宮廷における彼の重要性はManṣūr Khānの死によって左右されるものではなかったといえる。そして，その後も彼の勢力は宮廷周辺にとどまらず，マスリパトナムからさらにその周辺の王国東部の海岸地域にも伸張されていった。1629年3月には，ヴィシャカパトナム周辺の地域が彼のものになっていると伝えられている［VOC 1098：507 v］。

ところで，上述のようにオランダ語史料は，この時期Muḥammad Taqīは「マスリパトナムのopper-gouverneur」であったと伝えている。また彼はこの頃，「コンダパッリ〔ムスタファーナガル〕の山岳地帯（'t geberchte van Condepilla）の辺りに」城（kastel）を持っていたとも言われている［VOC 1095：75 v］。しかし，HSによると，当時彼はManṣūr Khānのミール・ジュムラの仕事を代行しており，宮廷周辺にいた様子が窺われる。そのため，Muḥammad Taqīが同名の管区の中心地であったとされるムスタファーナガルを，この頃実際に自らの拠点としてどの程度まで活用していたのかは不明である[38]。ただし，この時期，Muḥammad Taqīがハヴァールダールとして自分の兄弟を派遣し，それによってマスリパトナムに対して力を保持していたことは明らかである。

3　サル・ハイル時代のMuḥammad TaqīとMīrza Rūzbihān

サル・ハイルに就任したMuḥammad Taqīは，各地の反抗的なチャウドリー

38）このことからも，オランダ語史料に見える「マスリパトナムのopper-gouverneur」を，即ちムスタファーナガル管区のサル・サムトとみなすことは現段階では難しい。

(chaudhurī) やライースたち (ru'asā') を粛清し，その財産を没収して多くの収入を国庫にもたらした。この功績によって彼はSharīf al-Mulkとの尊称で呼ばれ，さらにサル・ダール (sar-dār: 軍司令官) の位も与えられた。このようにして，彼に対するスルターンの信任はますます篤くなり，やがて彼はこの国の「時の貴顕・重臣の拠り所となった」[HS: 76-77]。

一方，Muḥammad Taqīがサル・ハイルとなった頃のマスリパトナムにおいては，ヨーロッパ諸国との間の緊張が頂点に達していた。Muḥammad TaqīとFaṣīḥ al-Dīn Muḥammadは，上述のように，3人の現地の商人たちにヨーロッパ諸国との取引権と引き換えに3,000フンという金を払わせるその一方で，実際の取引は自分が独占して安く品物を買占め，さらにその品物に自らの利益分を上乗せしてこれらの商人たちに売りつけるなどの方法で儲けていた。しかしその結果，この頃までにこれらの3人の商人たちは経済的に窮してしまった[39]。このことはヨーロッパ諸国のマスリパトナムにおける取引を殆ど停止させ，彼らの交易活動に大打撃を与えた。そしてついに1628年10月初めにイギリスが，また翌年3月初めにはオランダもこの地の商館から人員を引き揚げ，マスリパトナム港の封鎖に踏み切った [EFI 1624-1629: 280-284; Coen VII: 1506-1507, 1653-1654]。

このときオランダが意図したことは，「用意の出来ている会社の全ての財産を当分Masilipatnam〔マスリパトナム〕から引き揚げさせ，人員はそこから撤収し，その上でマスリパトナムの船[40]を拿捕させること」であったが，それは「〔ハヴァールダールたちが〕会社とその債務者たちから奪い，未だに払っていない (schuldich sijn) ぶんを，そのムスリムたち (de Mooren)[41] にそのようにして〔拿捕した船の積荷によって〕払い戻させるため」であった [Coen V: 119]。しかし，この方法ではオランダは当初予想したほどの効果をあげることはできなかった。彼らが拿捕した唯一のマスリパトナムの船は，4月半ばにアチェから戻ってきたMīr Kamāl al-Dīn所有の船であり，同じくアチェから帰ってくるものと期待して狙っていたMuḥammad Taqīの船は結局姿を現さなかった。一方イギリスはより小さな船を襲撃して，損害を取り戻そうとしていた [Coen VII: 1648-1649, 1653-1654]。

---

39) この3人の商人 (Linganna, Ramanna及びKondor) の経済状態が厳しくなった理由は主に以下の如くとされる。1) オランダとの取引権を得るために3,000フンを支払わなければならなかったこと，2)転売する際に殆ど利益が残らないような値段でハヴァールダール(Muḥammad TaqīやFaṣīḥ al-Dīn Muḥammad) から品物を売りつけられたこと，3) Muḥammad Taqīが自分の商売を進めるために必要な場合に金を貸すよう強制されたこと [Arasaratnam & Ray 1994: 42-43]。

40) ここでは，「マスリパトナムを拠点として商業活動をしている現地の人々の船」を指すと思われる。

41) ここでは特に「Muḥammad Taqīとその一派」のことであろう。

Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad は，おそらくオランダによるマスリパトナム封鎖開始後の1629年4月頃にこの地を去った［Coen VII : 1649－1650］。それから彼の後任のハヴァールダールに就いたとされる Mīrzā Rūzbihān Iṣfahānī のもとでオランダとの対立を解消するための交渉が行われるようになった。そして，ムスタファーナガル，ムルタザーナガル，ラージャムンドリー Rajahmundry 及びエルール Eluru というゴールコンダ王国東部地域においてオランダに「平和に妨害されることなく交易させる」ことを許可する旨の勅令が12月11日付で与えられた[42]［CD : 231－234］。またイギリスも翌1630年にはマスリパトナムでの取引を再開した［EFI 1630－1633 : 76－82］。こうして，マスリパトナムにおけるヨーロッパ諸国との対立はひとまず沈静化し，港の封鎖も解かれた。

さて，Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad に代わってハヴァールダールになった Mīrzā Rūzbihān Iṣfahānī は，このときまでに既にゴールコンダ宮廷において相当に有力な位置を占めたことがあった。即ち，彼は Muḥammad Quṭb Shāh の治世の末期に Khwāja Afżal Turk が解任された後の10ヶ月ほどの間サル・ハイルを務めたが，1626年に ʻAbd Allāh Quṭb Shāh が即位して，Manṣūr Khān がミール・ジュムラになった際に解任されたという経歴を持っていた［HS : 33］。

Muḥammad Taqī とこのような経歴を持つ Mīrza Rūzbihān との関係は，Faṣīḥal-Dīn Muḥammad とのそれほど明解ではなかった。オランダとの交渉の過程で，1629年12月1日にマスリパトナムの上級商務員 Jacob de Wit と共にハイデラバードにやって来た Mīrzā Rūzbihān は，首都滞在中に，その頃マスリパトナムに残っていた Barent Pietersz. に宛てて密かに書簡［VOC 1100 : 74 r-v］を送っている。そして，その中で彼は Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad などの Muḥammad Taqī の一派が引き続きその港に対する権限を維持するなら，オランダ人は陸上には戻らないという姿勢を貫くべきだと助言し，もしそうなった場合は，スルターンとペーシュワーの Nawāb Allāmī Fahāmī Shaykh Muḥammad ibn Khātūn（Seckmametchaton）にその旨訴えるよう勧めている。しかし，Mīrzā Rūzbihān は同時にこのことが露見することを恐れ，この書簡を敢えてペルシア語では書かないようにさせたともいう。このことは，宮廷の有力者の中でも Shaykh Muḥammad ibn Khātūn は Muḥammad Taqī とは組していなかったことや，Mīrzā Rūzbihān が Muḥammad Taqī とは異なる立場でオランダとの交渉を行っていたことを示唆している。

また，上記の勅令が出された後の事情を伝えるオランダ語史料では，当時 Mīrzā Rūzbihān には Muḥammad Taqī からサル・ハイル職を奪おうとする意志もあったように

42）しかしオランダが支払いを要求していた損害，即ち総額105,946フンにのぼる歴代のハヴァールダールの政策による損失のうち，返済を約束されたのは僅か16,000フンで，それは年3,000フンと定められていた税を6年間減免する（5年間は免除，6年目は2,000フンだけ支払う）という形で返されることになっていた［GM : 289－290 ; CD : 234－235］。

記されている。

Mirsa Rosbaham〔Mīrza Rūzbihān〕が1630年6月からさらに1年間のそれ〔マスリパトナムの統治権〕を請け負いました。そのため，会社の取引はよき進展を得ることでしょう。上記のMirsa Rosbahanは会社に全く好意的（toegedaen）で，Tacki〔Muḥammad Taqī〕の敵（vijandt）です。そしてMirsa RosbahanはTaqīの（Tackijs）地位と職権を大層欲していて，サル・ハイルの（sercheyls）官職〔を得る〕ために150,000パゴダを王に差し出しました。多くの敵がおり，多くの借金があって，上述のTacki〔の地位〕は揺らいでいます［GM：291］。

しかし，実際にはゴールコンダ王国におけるMuḥammad Taqīの地位は彼の存命中は揺らがなかった。HSは，宮廷において彼が1631年5月にサル・ハイル在任のまま死去する[43]まで勢力を維持し続けていたことを伝えているし，1630年11月にマスリパトナムで記されたオランダの報告でも，彼の力はMīrza Rūzbihānの及ぶところではなかったように言われている。

ここでは毎日Miersarosbahan〔Mīrza Rūzbihānの到着〕が待たれていることを以前〔の書簡で〕貴下に書きましたが，彼はまだ現れません。彼の〔到着の〕遅れの理由は大部分がMamet Tackij〔Muḥammad Taqī〕のせいです。彼はこの人物〔Mīrzā Rūzbihān〕を請負料のことで引き止めていました。……今，Rosbahan〔Mīrzā Rūzbihān〕は〔マスリパトナムへ来る〕途中であるといわれていますが，どうなるのかは確かにはわかりません。……Tackij〔Muḥammad Taqī〕のことはというと，日々なお一層発展しています。彼はGolcondaにおいて絶大な力を有して（doen ende laet）おり，いや寧ろ王自身にも匹敵するほどです。彼の統治権と請負地（pachtinge）はあらゆる方向に拡がり，〔彼は〕Contapillij〔ムスタファーナガル〕，Elour〔エルール〕，Ragiemendron〔ラージャムンドリー〕，さらにその他の場所の統治権を自分のもとに請け負っています［VOC 1100：138 v－139 r］。

以上述べたように，Muḥammad Taqīは1620年代の半ばから31年に死去するまでマスリパトナムに大きな力を保持し続けた。特に1626年に2度目のハヴァールダール職を当時ミール・ジュムラであったManṣūr Khān Ḥabashīから請け負って以降は，Manṣūr Khānの後援に支えられて積極的に商取引や交易などの経済活動に参入した。1627年10月にManṣūr Khānに召還されてからも，彼は自分の兄弟であるFaṣīḥ al-Dīn Muḥammadをハヴァールダールとして残すことでマスリパトナムを自分の影響力下に確実に置き続けた。

---

43) Muḥammad TaqīはA. H. 1040年Shawwāl月19日（1631年5月21日）に病死した［HS：103］。

このようにしてこの港における経済活動を推進する一方で，宮廷では Manṣūr Khān に取って代わることに成功し，Manṣūr Khān の死後，1628 年 10 月にはサル・ハイルとなった。この頃からヨーロッパ諸国との衝突は激しくなり，また翌年からハヴァールダールとなった Mīrza Rūzbihān には，必ずしも Muḥammad Taqī の利益のためとはいえないような動きも見られたが，結局 Muḥammad Taqī はその死の直前までスルターンに重んじられ，スルターンは彼の死をいたく嘆いたということである［HS：103－104］。さらに，自ら船舶を所有して各地と取引を行い，新たな航路も開拓しようとしていたという Muḥammad Taqī の積極的な交易活動への参加は，Mīr Kamāl al-Dīn のそれと同じく，1620 年代後半に発展したマスリパトナムにおけるムスリムの交易活動の一翼を担っていた。

お わ り に

小稿においては，主に 1610－1620 年代のマスリパトナムのハヴァールダールに注目し，彼らを通じたマスリパトナムとゴールコンダ王国の関係について，特に Muḥammad Taqī の事蹟を追いながら述べてきた。その結果，マスリパトナムとゴールコンダ王国の関係は，基本的にハヴァールダールとその任命者という個人と個人の繋がりに基づいていたことが明らかとなった。ハヴァールダールはマスリパトナムにおける業務の「個人的な請負人」であり，上納すべき金を期限通り支払えない等のハヴァールダール側の理由によってのみならず，彼にその職を請け負わせた人物の側の要因――異動や失脚など――によっても職を失うことがあった。このように，ハヴァールダールにとって自分の任命者との関係はきわめて重要であった。特に 1620 年代には，サル・ハイルやミール・ジュムラなどの同王国の高官とマスリパトナムのハヴァールダールとの間にはしばしば非常に緊密な関係があった。

そうした中で，特に II－3 で述べたようなオランダ語史料の示唆する Mīrza Rūzbihān の Muḥammad Taqī に対する姿勢は，マスリパトナムのハヴァールダールとその任命者の関係を考える上で興味深いものである。上述のように，Mīrza Rūzbihān については，現職のサル・ハイルである Muḥammad Taqī のもとでハヴァールダール職を得ていながらそのサル・ハイルの地位を狙い，Muḥammad Taqī らのマスリパトナムの経営策に端を発するオランダとの衝突を解消するための交渉を進めながら，陰ではこの地域に対する Muḥammad Taqī らの権限を奪おうとしており，そのための助力を Shaykh Muḥammad ibn Khātūn に求めていたと伝えられている。このことから，ハヴァールダールにとって「直接の上役 (superior)」［Arasaratnam & Ray 1994：35－36］である任命者は，ある意味では競争者，即ち追い落すべき相手としての側面も持っており，そのためにハヴァールダールは宮廷周辺の別の有力者と通ずることがあったともいえる。

Mīrza Rūzbihān の場合はマスリパトナムでのハヴァールダール職を得る前から既に宮廷において相当の立場を得ていたので，当時のハヴァールダールたちの中では多少例外的な存

在であったかもしれない。しかし，Muḥammad Taqī もまた，ハヴァールダール職のみならず，いわばこの職を与えた「直接の上役」である Manṣūr Khān 自身をも「踏み台」にしたように見受けられる。Manṣūr Khān からハヴァールダール職を請け負ってその業績で認められ，首都のコトワール職に据えることを目して召還されたはずの Muḥammad Taqī は，その後何時の間にか後援者であった Manṣūr Khān の立場に取って代わっていた。こうしたことから，ゴールコンダ王国の統治体制の中でハヴァールダールとその任命者との関係はあくまでも徴税などの業務の請負に関する契約に基づくものであり，それ以外の点においては必ずしも上意下達のものではなく，また相互の力関係も情況によって変動する可能性があったことがわかる。そのような中で，Muḥammad Taqī が自分の兄弟である Faṣīḥ al-Dīn Muḥammad を後任のハヴァールダールとして据えて，マスリパトナムを自分の影響下に置き続けたことは，ハヴァールダール職が Muḥammad Taqī にとっての「踏み石」となり得た理由の一つとしてあげられよう。

以上述べてきたように，マスリパトナムとゴールコンダ王国の関係，或いは同王国によるマスリパトナムの統治は，ハヴァールダールとその任命者を介したものであった。小稿においては，主としてハヴァールダールたちと，彼らとその任命者たちの関係に注目して述べてきたが，このハヴァールダール職の任命者についてはさらなる検討を加える必要があろう。この点に関しては，例えばオランダ語史料で "groot-gouverneur" や "opper-gouverneur" などと呼ばれる地位にあったとされる人々やその職務の実態について，ゴールコンダ側の視点を取り入れた一層の吟味が求められる[44]。Muḥammad Taqī はそのような人々のうちの一人で，マスリパトナムのハヴァールダール職を足がかりにゴールコンダ王国において勢力を伸張した人物の一例ではあるが，その他にも 1630 年代後半以降の Mīr Muḥammad Sayyid Ardistānī などの活動は非常に重要である。また，ゴールコンダ王国における交易港支配についてより広く理解するためには，マスリパトナム以外の同王国の港にも注目する必要があるだろう。そのためにも今後は分析の対象とする時代を拡げつつ，より多くの事例について考察を加えなければならないと考える。こうしたことはいずれも今後取り組むべき課題として残されている。

[なお，本稿は財団法人大和銀行アジア・オセアニア財団国際交流活動助成による研究成果の一部である。]

---

44) 今回利用することができたゴールコンダ側の史料は HS のみであったが，例えば Sulṭān Muḥammad Quṭb Shāh の治世の事象については，*Tārīkh-i Sulṭān Muḥammad Quṭb Shāhī* が有用であろうと思われる [Sherwani 1974 : 685 – 686 ; Storey 1970 : 746 – 747]。

参考文献

VOC : Overgekomen en Papieren, Verenigde Oost-Indische Compagnie, Nationaal Archief, The Hague.

CD : *Corpus diplomaticum Neerlando-Indicum. Verzameling van politieke contracten en verdere verdragen door de Nederlanders in het Oosten gesloten, van privilegebrieven, aan hen verleend, enz. 1ste deel (1596-1650)*. ed. J. E. Heeres. The Hague, 1907.

Coen : Jan Pietersz. Coen, *Bescheiden omtrent zijn bedrijf in Indië*. ed. H. T. Colenbrander & W. Ph. Coolhaas, 7 vols. The Hague, 1919 - 53.

DFI : *The Dutch factories in India 1617-1623*. ed. O. Prakash. Delhi, 1984.

DR : *Dagh-register gehouden int Casteel Batavia, vant passerende daer ter plaetse als over geheel Nederlandts-India*. ed. J. E. Heeres. The Hague, 1887 - 1931.

EFI : *The English Factories in India*. ed. W. Foster. Oxford, 1906 - 1927.

Floris : *Peter Floris. His Voyage to the East Indies in the Globe, 1611-1615*. ed. W. H. Moreland. London, 1934.

GM : *Generale Missiven van Gouverneurs-Generaal en Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie* I. ed. W.Ph. Coolhaas. The Hague, 1960.

HS : Niẓām al-Dīn Aḥmad al-Ṣa'idī, *Ḥadīqat al-Salāṭīn*. ed. Sayyid 'Alī Aṣghar Bilgrāmī. Hyderabad, 1961.

LEIC : *Letters Received by the East India Company from its Servants in the East*. ed. W. Foster, 4 vols. London [Amsterdam], 1896 - 1900 [1968].

Relations : *Relations of Golconda in the Early Seventeenth Century*. ed. W. H. Moreland. London, 1931.

Van Dam : Pieter van Dam, *Beschryvinge van de Oostindische Compagnie*. II(2). ed. F. W. Stapel. The Hague, 1932.

Alam, S. M. (1959) Masulipatam — A Metropolitan Port in the Seventeenth Century. *IC* 33 (3), 169 - 187.

Alam, M. & S. Subrahmanyam (1998), Exploring the Hinterland : Trade and Politics in the Arcot Nizamat (1700 - 1732). In : *Politics and Trade in the Indian Ocean World*, ed. R. Mukherjee & L. Subrahmanian. Delhi.

Arasaratnam, S (1986) *Merchants, Companies and Commerce on the Coromandel Coast*, 1650 - 1740. Delhi.

Arasaratnam, S. (1994) *Maritime India in the Seventeenth Century*. Delhi.

Arasaratnam, S & A. Ray (1994) *Masulipatnam and Cambay. A history of two port-towns 1500-1800*. Delhi.

Brennig, J. J. (1977) Chief Merchants and European Enclaves. *Modern Asian Studies* 11.

Dijk, L. C. D. van (1858) *Zes jaren uit het leven van Wemmer van Berchem.* Amsterdam.

Ghauri, I. A. (1977 a) Local Government under the Sultanates of Bijapur and Golconda-Haidarabad. *IC* 51, 53 - 67.

Ghauri, I. A. (1977 b) Central Structure of the Qutb Shahi Kingdom of Golconda. *IC* 51, 187 - 199.

Gommans, J., L. Bes & G. Kruijtzer (2001) *Dutch Sources on South Asia c.* 1600 - 1825, vol. 1. New Delhi.

Prakash, O. (1998) *European Commercial Enterprise in Pre-Colonial India* (The New Cambridge History of India, II 5). Cambridge.

Raychaudhuri, T (1962) *Jan Company in Coromandel 1605-1690.* The Hague.

Richards, J. F. (1975) *Mughal Administration in Golconda.* Oxford.

Sarkar, J. N. (1979) *The Life of Mir Jumla.* 2 nd revised and enlarged edition, New Delhi.

Sherwani, H. K. (1974) *Histyory of the Qutb Shahi Dynasty.* New Delhi.

Storey, C. A. (1970) *Persian Literature. A Bio-Bibliographical Survey.* I (rep). London.

Subrahmanyam, S (1988) Persians, Pilgrims and Portuguese : The Travails of Masulipatnam Shipping in the Western Indian Ocean, 1590 - 1665. *Modern Asian Studies* 22(3), 503 - 530.

Subrahmanyam, S & C. A. Bayley (1988) Portfolio capitalists and the political economy of early modern India. *IESHR* 25(4), 401 - 424.

Subrahmanyam, S (1990 a) *The Political Economy of Commerce Southern India, 1500-1650.* Cambridge.

Subrahmanyam, S (1990 b) *Improvising Empire. Portuguese Trade and Settlement in the Bay of Bengal 1500-1700.* New Delhi.

Subrahmanyam, S (1992) Iranians Abroad : Intra-Asian Elite Migration and Early Modern State Formation. *Journal of Asian Studies* 51(2), 340 - 363.

Subrahmanyam. S (1997) Masulipatnam Revisited, 1550 - 1750 : A Survey and Some Speculations. In : *Gateways of Asia. Port Cities of Asia in the 13th-20th Centuries*, ed. F. Broeze. London.

Subrahmanyam, S (1999) 'Persianization' and 'Mercantilism' : Two Themes in Bay of Bengal History, 1400 - 1700. In : *Commerce and Culture in the Bay of Bengal 1500-1800*, ed. O. Prakash & D. Lombard. New Delhi.

（京都大学大学院文学研究科）